

国際ガラス年 2022 : 国連採択経緯と実行委員会の活動計画

International Year of Glass 2022: Process of UN Approval and Activity Plans of IYOG Committee

京大院人環 ○ 田部 勢津久

Kyoto Univ., °Setsuhisa Tanabe

E-mail: tanabe.setsuhisa.4v@kyoto-u.ac.jp

去る 2021 年 5 月 18 日, 米ニューヨーク国連本部で開催された国連総会において, 「2022 年を国際ガラス年(International Year of Glass, IYOG)とする」議案が正式採択された. 国連採択までに国際ガラス委員会(ICG)を中心とする組織による様々な尽力があつて, 賛同書の集約, 決議案の作成, 日本を含む計 19 ケ国を共同提案国とする議案提出と正式採択に至った.

人類史上かつて新材料が文明を変革した石器, 青銅器, 鉄器時代になぞらえて, 初めて「ガラス時代の到来」という宣言[1]を行つたのは 2014 年米コーニング社で, 奇しくも国際光年 IYL2015 の前年である. 翌 2015 年には The American Ceramic Society 学会論文誌である International Journal of Applied Glass Science 誌において, 国際光年 IYL2015 特集号「Glass and Light」が編集出版され[2], 光科学技術の発展におけるガラス材料の重要性を再認識する企画となった. その翌年同誌 2016 年の特集号「The Glass Age」が編集され, Morse らによる「Welcome to the Glass Age」と題した巻頭論文[3]がある. 2018 年横浜で開催された ICG 年会での運営理事会において A. Duran 新会長により, 国際ガラス年の国連採択を目指すこと, マイルストーンが数種ある 2022 年ターゲットとすることが合意された. その後 1600 に及ぶ賛同書の集約, Youtube によるプロモーションビデオの発信[4], 国連スペイン大使による共同提案書合議と演説などを経て採択に至った. 採択に先立つ 2020 年 12 月には産官学の研究者や工芸作家も含む約 60 名からなる日本実行委員会も組織され, 種々の活動を開始している.

なお, 2022 年には世界中で数え切れない数の記念行事・特集号出版が計画されている. 3 大行事のみを挙げるとすると, 2 月 10,11 日ジュネーブ国連人權の間での国際開会式, 7 月 3~8 日 ICG コングレス (3 年に 1 度の大会) がベルリンで開催, 国際閉会式の主催運営は日本が担当することが正式決定されており, 12 月 8,9 日に東大安田講堂で開催される予定である. 海外での諸行事, 国内開催行事については, 紙面も尽きたので以下のリンク, 国際および日本実行委員会 HP[5]を参照されたい.

文献

- [1] “Welcome to the Glass Age, Presented by Corning”, (2014); <https://www.youtube.com/watch?v=bbX9KOpDJME>
- [2] L.D. Pye, M. Affatigato, “Editor’s Note”, *Int. J. Appl. Glass Sci.* 6[4], (2015) 303.
- [3] D.L. Morse, J.W. Evanston, “Welcome to the Glass Age”, *Int. J. Appl. Glass Sci.* 7[4], (2016) 409.
- [4] “Worldwide presentation of the United Nations International Year of Glass 2022”; <https://www.youtube.com/watch?v=A6ZEaWvlz6k> (2020)
- [5] International Year of Glass 2022; iyog2022.org; 国際ガラス年 2022 日本実行委員会; iyog2022.jp